男節用集如意宝珠大成の編纂をめぐって

谷 隆 史

はじめに

をはじめ元禄増補本系統には含まれない節用集の編纂と刊 置しつづけたとみられる。一方その間も、書言字考節用集 広範に流布しはじめる宝暦年間頃までは節用集の主流に位 所収語に若干の増補削減はみられるものの、早引節用集が 刊行の大広益節用集に始まる後者の系統は、諸本によって 節用集の系統(以下、元禄増補本系統と称する)に移行し の所収語を受け継ぎつつも文書用語や書簡用語を増補した 行は行われている。山本序周の編纂になる享保元年(一七 つつあった。現在確認できる中では元禄九年(一六九六) を大部分受け継ぐのみであった頭書増補節用集大全の系統 後半以降、版本の節用集の主流は、易林本節用集の所収語 一六)刊行の男節用集如意宝珠大成(以下、男節用集と称 (以下、頭書増補本系統と称する)から、先行する節用集 慶長年間の易林本節用集刊行からほぼ百年を経た元禄期

字体に改め、返点や傍訓は本論の理解に支障がない限り多

くを省いている。また、割書は〔 〕内に示した。

ど、形式上の特徴も存する節用集である。また、編纂者で どの内容上の特徴のみならず、「い」の部巻頭の見出語を 俚言への配慮がみられることや注文が充実していることな 資料と所収語の性格を検討していくことにする。 てきた節用集といえる。本稿では、男節用集の主要な編纂 ある山本序周が往来物を編纂していることからも注目され 配する当時一般的な節用集の体裁を有している。しかし、 ろは意義分類体の辞書本文に頭書及び本文の前後に付録を する)もその中の一本である。男節用集は大本、一冊、い 「陰陽」とすることや所収語を行書のみで掲出することな なお、各書の記述の引用に際して、異体字は多く現行の

男節用集の特徴

点が明らかにされている。 及び高梨信博氏の論考に言及が存するので、両氏の論考に 確認しておく。まず、若杉氏の論考においては次のような よって明らかにされたことを本稿に関連する部分を中心に 男節用集及び編纂者の山本序周に関しては、若杉哲男氏

同書の頭書に存する「節用字づくし」と男節用集の所収語 ぞれに対応する替文章を掲載する往来物として、享保四年 林節用筆海往来は多くの書状について受取人の上中下それ 本故事談、文林節用筆海往来の編述をしている。特に、文 ①山本序周は男節用集の他に女節用集罌粟嚢家宝大成、 (一七一九)の刊行以降、版を重ね広く流布した。また、 絵

は一致するところが多い。

ど、非常に多くの語に注文が存する。また、「い」の部だ ③「い」の部では四一一語中二七七語に注文が付されるな 門他計三書肆の版行本及び、享保元年の版行本にやや先立 版行本、元文元年(一七三六)一一月植村屋藤三郎他計三 ②男節用集には、享保元年八月須原屋茂兵衛他計三書肆 書肆の版行本、明和六年(一七六九)九月、柏原屋與左衛 つと思われる本が確認される。

けでも「北史」や「史記」等二○種類以上の出典が注記さ

節用集と比較しても独自の所収語や注文が多い。 れている。また、 易林本節用集や元禄・宝永頃の一

以外の俚言にも言及するところがある。 及した注文がある。また、数の上では少ないが、本草関係 九)刊行の大和本草を参照して本草関係の俚言や方言に言 ④出典としては必ずしも示されないが、宝永六年 (一七)

男節用集にも触れ、女節用集罌粟囊家宝大成と同様に、見 また、高梨信博氏は節用集諸本の凡例の紹介を行う中

集の凡例にはこのことについて「此節用集の本文字を行字集の凡例にはこのことについて「此節用集の本文字を行字 る注文がきわめて多い。さらに、 したものであるが、男節用集の注文にも正誤や雅俗に関す といえる。また、文林節用筆海往来は上中下の替文章を示 ともに、往来物と節用集の両方の編纂者として重要な人物 のは近世発明の人の考へ演る処を記するもの也」とある。 ても凡例に「本文字の下に小 註或は正誤の説等を加ふも いる。なお、若杉氏の③の言及にあった多くの注文につい ゝの故に二行の細字にして「煩」しきを除くもの也」として 蓋し省字を以て本字は知がたく本字を以て省字はあひしるけんでしょう。 とすることは行は真の点画にして、草はこれを省せる也。 いる点に男節用集の特徴が存する旨を述べている。 出語を通常の真草二行の形式ではなく行書のみで掲出して 若杉氏も述べる通り、山本序周は苗村丈伯、中村平五と 男節用集には俗字正誤抄

期の試みとして注目される。
に半濁点が付されていることも節用集としては最も早い時あったと考えられる。ちなみに、部分的ではあるが、傍訓山本序周は書記言語の運用に対してかなり敏感な人物で山本序周は書記言語の運用に対してかなり敏感な人物で

を編纂したのであろうか。れでは、山本序周はいかなる書物を参照して新たな節用集の上、先行研究をもとに男節用集の特徴を概観した。そ

三 男節用集の編纂資料

注記数で注目されるのは、

合類節用集や新刊節用集大全

記と一致しない場合もそのまま掲出した。 表記例の中に含めた。また、「古事紀」のように現行の表明らかに同一の書名を示していると思われる例は代表的な「字書」のように特定の書物をさしているか不明なものは「字書」のように特定の書物をさしているか不明なものは「字書」のように特定の書物をさしているか不明なものは、「字書」のように特定の書物をさしている書名を確認しておく。

当数に及ぶことは容易に想像されるところである。しかし、の編纂資料であったとは考えがたい。孫引によるものが相もちろん、出典注記に示されたこれらの書物がすべて実際書名は和漢の書物にわたり、合計で一三○余りである。

める語の典拠としていかなる書物を重視していたかを検討仮に孫引きによって示された出典であっても男節用集に収

する手がかりにはなる。

べきであろう。
一三○余という書物の数は、五六○余の書物が注記にみる。
両書が大部の節用集であることを勘案するならば、男ばないが、同年刊行の合類節用集の八○余を大きく上回ばないが、同年刊行の合類節用集の八○余を大きく上回ばないが、同年刊行の合類節用集の八○余の書物が注記にみられる延宝八年(一六八○)刊行の新刊節用集大全には及られる延宝のであるう。

抄と多識編の順位が合類節用集や新刊節用集大全とは逆に 類聚抄よりも、万葉集や日本書紀からの引用を示す注記が 類聚抄よりも、万葉集や日本書紀からの引用を示す注記が 類聚抄よりも実際のテキストをより重視していたことが は辞書類よりも実際のテキストをより重視していたことが はお書類よりも実際のテキストをより重視していたことが はお書類なりまである。

(一七一五) 刊行の本朝俚諺のように刊行からそれほど時辞書類も元禄七年(一六九四)刊行の和爾雅や正徳五年

なっていることも注目される。

=	Ħ
7	又
_	-

22	22	15	15	15	15	15	15	15	11	11	11	11	7	7	7	7	6	5	4	3	2	1	順位
職原抄	河海抄	大和本草	本草	庭訓	神代鈔	左傳	旧事紀	愚案	本朝俚言	多識	太平記	古文諺解	藻塩草	神代	史記	字彙	詩経	遊仙窟	文選	和名抄	日本紀	万葉集	書名・人名
3	3	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5	5	7	7	7	7	9	14	18	28	40	53	数
41	41	41	41	41	41	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	22	22	22	22	22	順位
因果経	医方明鑑	伊勢	篤信	東鑑	あいのふ抄	孟子	無名抄	眠寤集	岷江入楚	武備志	荘 子	説文	事文前集	古事紀	江談抄	源氏	漢書	和爾雅	八雲抄	百丈清規	野槌	山海経	書名・人名
1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	数
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	順位
左襄	古文	古語拾遺	国史	後漢書	皇明宝記	荒政要覧	江次第	顕註密勘	源氏水源抄	見安	月令広義	御覧	虚堂録	玉篇	義楚六帖	喜撰式	歌林良材	活法	貝原氏	延喜式	円覚経	栄花物語	書名・人名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	数
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	順位
説郛	世事便用	性理大全	図絵宗*	神皇正統記	神書	新猿楽記	続日本紀	書経	盛衰記	證治要訣	しゅんくはんの謡	袖中抄	十王経	釈日本紀	事文類聚	事物紀原	七十二候	下紐	詩経跪	詩	三才図会	再遊紀行	書名・人名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	数
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41,	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	順位
風窓小牘	稗文	白居易詩	白氏文集	南草雑録	東坡志林	夷堅志	陶淵明集	定家卿	徒然草	沈存中筆讀	長恨歌	竹取	代酔篇	太子傳	鼠璞	祖底事苑	続捜神記	宗祇	選集抄	仙覚	世範	節用集	書名・人名
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	数
			41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	順位
書名・人名総数	種類総数		論語	朗詠集	類聚国史	梁塵鈔	梁塵愚案	梁塵	琉球神道記	羅山子	維摩経	野客サウショ	文徳実録	名義集	本朝食鑑	本草綱目	梵総経	北史	方丈記註	夫木集	覆醬集	風俗通	書名・人名
	135		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	数

といえる。男節用集が元禄増補本系統のような節用集とはしては和漢の文学作品や辞書等の書名を注記する例が多いしては和漢の文学作品や辞書等の書名を注記する例が多い。「庭・下紐等の古典の注釈書がみられることも興味深い。「庭塩草のような韻文作成に関わる辞書や、河海抄・顕注密勘塩草のような韻文作成に関わる辞書や、河海抄・顕注密勘塩草のような韻文作成に関わる辞書や、河海抄・顕注密勘塩草のような節用集とは

異なった方針で編纂されたことは明らかであろう。

例が多いことや、同じ辞書でも多識編よりも和名類聚抄からの引用が多いことや、同じ辞書でも多識編中がらの引用とみらの引用が多いことは、和爾雅の凡例に「倭書以日本書紀らの引用が多いことは、和爾雅の凡例に「倭書以日本書紀らの引用が多いことは、和爾雅の凡例に「倭書以日本書紀の出典注記を数えるのみではあるが、男節用集の編纂資料の出典注記を数えるのみではあるが、男節用集の編纂資料の出典注記を数えるのみではあるが、男節用集の編纂資料の出典注記を数えるのみではあるが、男節用集の編纂資料の出典注記を対為本以林氏多識編中邨氏訓蒙図彙等継之」とらの引用が多いことや、同じ辞書でも多識編よりも和名類聚りもの引用とようところで、辞書類よりも万葉集や日本書紀を出典とするられる例がある。

男節用集 わ乾坤和爾雅 神祇

さらに、男節用集の頭書には「名所」として名所や城下、入海〔万葉〕 海底〔喜撰式〕 和爾雅 地理

集の編纂資料の中でもかなり主要な位置にあったと考えらま地名とほとんど一致する。したがって、和爾雅は男節用語は和爾雅「地理門下」の「日本国名所」に掲出されている語のうち「古しへより名所ト定たるは本屋敷、宿場等を各国ごとに列挙する付録が存するが、そこ屋敷、宿場等を各国ごとに列挙する付録が存するが、そこ

記述と一致する。するが、これは元禄一三年(一七〇〇)刊行の日本釈名のするが、これは元禄一三年(一七〇〇)刊行の日本釈名のちなみに、「貝原氏」として記されている注文が一例存

れるのである。

つゞらにてあみたる器を行李卜云も此意也卜〕一行李〔…貝原氏日ク中華にて旅に持行を行李といふ和俗

男節用集ひ

出典として注記されている箇所以外にも大和本草や和爾二行李などゝいへり。」 日本釈名 雑器 りと云は、あやまりなり。たびにゆく装物を一行李、りと云は、あやまりなり。たびにゆく装物を一行李、ない。こ

大黒神

とするは誤れりと…」

男節用集た

神仏

[…今案大黒神者天竺|寺僧食厨所祭之神也或以為倭

〔篤信云大黒神は天竺の寺僧の食厨に祭神也和の神

草、日本釈名と貝原益軒の著作が多く参照されていること 際には編纂資料とされていたことになる。和爾雅、大和本 雅から引用している注文がみられることは既に述べた。 本釈名の場合は出典としては一例も示されていないが、実 Н

は興味深い

定していく手がかりにはなる。 から引用されているかが判明すれば、主要な編纂資料を特 物をも編纂している山本序周が節用集を一冊しか所持して いなかったと考える必要もないわけであるが、どの節用集 節用集を出典として示している例も一例みられる。 往来

に「くま」の訓をあてる例は早く合類節用集にみ 月のくま也二字共に河海抄に出たり…又節用集に 暈の字を書けり…〕 男節用集く 乾坤

られる。 第 [月—]

しかし、この語は、合類節用集の所収語の大部分を受け

合類節用集

天地

ク

群を頭書に掲出する元禄一〇年(一六九七)刊行の頭書増 継いでいる貞享五年(一六八八)刊行の鼇頭節用集大全、 に、合類節用集や字尽重宝記の所収語によって増補した語 三才全書俳林節用集 字尽重宝記と称する)や、元禄一三年(一七〇〇)刊行の 元禄六年 (一六九三) (以下、俳林節用集と称する)、さら 刊行の広益字尽重宝記綱目(以下、

> 語)「東雲」(「し」時候)の四例は合類節用集にも同じ出 典が示されて収められている。合類節用集、或いは合類節 を特定することは困難である。ただし、この語が合類節用 字節用集など元禄増補本系統の節用集にも収められている。 用集の所収語を踏襲する辞書が編纂資料であった可能性は 真宝後集諺解大成)を出典としている五例のうち、「箋 は注意しておくべきであろう。例えば、「古文諺解」(古文 集から後の節用集諸本に受け継がれていった語であること したがって、この語の有無のみによっていずれかの節用 (「ち」言語)「閣思君」(「わ」言語)「造」(こ)言

主要な編纂資料の検討

きわめて高いといえるのである。

用集との比較後に問題が存する場合に検討し直すことにす 参照された可能性も検討しなければならないが、三本の節 二行節用集や合類節用集の所収語を受け継ぐ節用集諸本が を加えた計四本である。貞享三年(一六八六)刊行の広益 所収語に特徴のある、合類節用集、新刊節用集大全、 したのは、編纂時に参照することができた節用集の中でも 致するかを実際に確認していくことにする。比較の対象と 元禄増補本系統に属する頭書増字節用集の三本に、 ここで、男節用集の所収語が先行の辞書とどのように 和爾雅

め、巻頭に近い部から比較的所収語の少ない「へ」の部をする。比較する所収語の範囲には、語順との関係も示すたい部分があった場合に適宜参考にして考察を進めることにる。また、その他の辞書は四本の辞書によって網羅されな

のように一致しているかを示したのが表二である。男節用集「へ」の部の所収語が四本の辞書の所収語とど

選んだ。

の場合と同様である。例えば、「碧落」は、三本の節用集の場合と同様である。例えば、「碧落」は、三本の節用集にないて頭書に配された増補語群中に収められている語には、増」を最初に付した。三本の節用集について頭書に配された増補語群中に収められている語には、増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集については最下段は「増」を最初に付した。三本の節用集において頭書に配された増補語群中に収められている語にはが、一致する語の所名を巻数、丁数、行、行内の掲載にそれぞれの「へ」部の所在を巻数、丁数、行、行内の掲載にそれぞれの「へ」部の所名と同様である。例えば、「碧落」は、三本の節用集の項では一致する場合はゴシック体と斜体字の使用は節用集の項では一致する場合は高いでは、一致する語には最初に、を付して、対した。

巻一の一丁表五行目の三番目に掲出されており、注文は一されており、注文も一致している。また、和爾雅の場合は

男節用集の「へ」の所収語は一○五語であり、他の節□致していないということになる。

甪

の比較では一致しない語がいずれも二割をこえている。

集と比較するときわめて少ない。しかし、各々の節用集と

はみられないので、別に頭書増字節用集のような別の辞書にかし、和爾雅が一致する割合は低いとみることができる。「た田される。以下、この両書を中心に各門ごとにみていく。を神門から気形門あたりまでに、合類節用集は言語門後半乾坤門の五語のうち四語は和爾雅と合類節用集によって、前間することができる。「俗に部屋」という注文は両書にあかし、頭書増字節用集や新刊節用集大全は語順の上でほとができれる。以下、この両書を中心に各門ごとにみていく。 大田では、和爾雅が一致する割合は低いとみることができる。 大田では、一致する語の割合だけをみるならば、三本の節用集が拮

ら付されたものとみることができる。雅においてこれらの三語が暁旦類に収められていることか「平旦」以下の三語に付された「早朝也」の注文は、和爾時候門の五語は語順と注文を含めほぼ和爾雅に一致する。

から引用したものとみられる。

においてはいずれも乾坤門ないしは天地門の一番目に掲出

人倫門も全体に和爾雅の語順に近く、

いくつかの語や左

	所収語	傍訓	意義	注文・()内左訓	頭書増字	合類節用	新刊節用	和爾雅
1	門収 語 碧落	へきらく	息莪	天をいふ也	與音唱子 乾1	天1	天1	101才53
					取 !	<u> </u>		
2	廟	べう	乾	(やしろ)先祖を祀る所		<u> </u>	天7	220081
3	屛	へい	乾			居 4		225才33
4	隔室	ヘや	乾	俗に部屋と書	乾 7	居1		
5	*部屋	ヘや	乾		乾8		家3	
- 6	冰泮月	へうはんげつ	時	二月なり				205才34
7	病月	へいげつ	時	三月也		時1		205ウ61
8	平旦	へいたん	時	早朝也	時1		時3	216ウ22
9	*平明	へいめい	時	同	時2		時 4	216ウ21
10	*平暁	へいきょう	時	同				216023
11	褙匠	へうぐし	人	俗に表具師	増人2	人物 5		306ウ54
12	*表具師	へうぐし	人		増人2			
13	臍	へそ	人	本ほぞ	支2	人支2	支3	315ウ23
14	臍帯	へそのを	人	(ほぞのを)	増支2	人支3	~ .	315024
15	無名指	べにさしゆび		(10 0 3 0)	1820	人支1	支1	316485
16	屁	^		(へひる)	支8	人支 4	態12	010400
17	此 陰茎	へのこ		男勢也		/X 4		216761
			<u> </u>		支5	TI- 1	支7	316761
18	嘔吐	へどつく	<u> </u>	(をうど)	書88	不仁4	態8	318713
19	水痘	へないも	<u> </u>	(ときしらず)		不仁2		320083
20	*水疱	へないも	<u> </u>					320ウ83
21	療疸	へうそ	스_		支1	不仁1	支2	
22		へう	戾		気1	獣1	気1	601021
23	別足	べつそく	戾		増気 4	鳥 5	気2	
24	整尺	へひりむし	戾	物を觸レハそのたびたびにへひる 也		虫1	気 9	616ウ62
25	鼈甲	べつかう	戾		気 6		器34	613ウ62
26	蛇	へび	気	(くちなわ)		龍21	5 戻	610オ21
27	* 虵	へび	戾		気3	龍21	5. 反	610オ21
28	*巨虵	をゝへび	戾	(をろち)				610才22
29	*鳥蛇	からすへび	戾	(くろへび)		龍25	か気	610オ23
30	* 水蛇	みづぐちなわ	戾			龍45		610 124
31	*蝮蛇	くちばみ	戾	(まむし)		龍27		610才33
32	*両頭蛇	りやうとうの へび	戾	あとさきにかしら有		離48		610142
33	*銀蛇	しろへび	戾			龍41	し気47	610 1 31
34	*黄頷蛇	ねずみぐちなは	戻	(やしらみ)		龍38		610才32
35	*蚖	こぐちなは	良	(1000)		龍30		610741
36	*蛇蛻	へびのぬけがら	一次 一			龍51	気7	610752
37	*岐首蛇	キシユジヤ	皮	また有てかしら二つ		龍49	X1 /	6 1 0 才 5 1
38	薜荔	へきり	草	(いたひ) 木饅頭共云なり	 	AE 7 J		010401
39	経瓜	へちま	草	(いたび)不腹頭犬五なり	草 4	草8	草1	701-10
40	111111111	へりま べんけいさう	草	毎些にてもしめしニレノ而ましむ	早 4	早り	早1	704オ42 714オ71
40	景天	へんけいさつ	早	筑紫にてちとめと云よく血をとむ				
	1			又あせほの薬				
41	女青	へくそかづら	草					(2)
42	帶	へた	草	ほぞ也柿の	草 6	草11	草18	629ウ41
42 43	帶 *帯	へた へた	草草	ほぞ也柿の			,	629ウ41 629ウ41
42	帶	へた	草	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中	草6	草11 草1	草18 草8	629ウ41
42 43	帯 *帯 紅藍花	へた へた べにのはな	草草	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと	増草 9	草1	,	629ウ41 629ウ41
42 43 44	帶 *帯	へた へた	草草	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中 略の詞也又未摘花共云			,	629 941 629 9 41
42 43 44 45 46	蒂 *蒂 紅藍花 分餅 粒羹	へた へた べにのはな へぎもち べつかん	草草	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡わりよつで呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中 略の詞也又未摘花共云	増章 9 増食 7 食 1 6	草 1 飲 3 飲 5	草8	629 941 629 9 41
42 43 44 45 46 47	帯 *帯 紅藍花 分餅 鼈糞 編綴	へた へた べにのはな へぎもち	草草草衣衣衣衣	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中 略の詞也又未摘花共云 (英の類也礼家ニー養一麹二美二麹 三美三麹とて饗応の作法あり	増草9 増食7 食16	章 1 飲 3 飲 5 衣 6	章 8 飲 4 絹 2	629041 629041 709441
42 43 44 45 46 47 48	帯 *帯 紅藍花 分餅 鼈羹 編綴 綜	へた へた べにのはな へぎもち べつかん へんてつ	草草草衣衣衣衣	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中 略の詞也又未摘花共云	增章 9 增食 7 食 1 6 食 1	章 1 飲 3 飲 5 衣 6 衣 3	草 8 飲 4 絹 2 絹 9	629 941 629 9 41
42 43 44 45 46 47	帯 *帯 紅藍花 分餅 鼈糞 編綴	へた へた べにのはな へぎもち べつかん へんてつ	草草草衣衣衣衣	ほぞ也柿の (くれなる) 葉藍に似たりむかし 呉国より渡れりよつて呉のあいと 呼し也くれなるはくれのあいの中 略の詞也又未摘花共云 (英の類也礼家ニー養一麹二美二麹 三美三麹とて饗応の作法あり	増草9 増食7 食16	章 1 飲 3 飲 5 衣 6	章 8 飲 4 絹 2	629041 629041 709441

	所収語	傍訓	意義	注文・()内左訓	頭書増字	合類節用	新刊節用	和爾雅
52	輕粉	べに	器		食14	器12	器20	526024
53	*燕脂	かたべに	器		増器3	か器 9 5		
54	巻子	へそ	器	本はをだまきと云	増食1	衣1	絹7	
55	榧	へぎ	器	うす板の	器 8	器 7		528ウ65
56	瓶子	へいじ	器		器 3	器 9	器 1	521ウ83
57	箆	へら	器		器 5	器 6	器 3 1	
58	行厨	べんとう	器	俗に弁当と云	器 2			521ウ15
59	*弁当	べんとう	器			言61	器10	521015
60	平等	べうどう	言		言31	营65	言36	
61	平懐	へいくわい	言		言21	言 5 2	言28	
62	平伏	へいふく	言					
63	弁口	べんこう	言		言 3 2	言30	態 3	
64	弁舌	べんぜつ	삠			言29	態 2	
65	兵法	へいほう	言				態1	
66	閉口	へいこう	言		言53	言32	营40	
67	可	べし	言		言73	言1	言70	
68	*宜	べし	言		増言10	言1	言69	
69	*應	べし	言		言72	言1	言66	
70	偏屈	へんくつ	言		1		言 5	
71	片時	へんし	言			言64		
72	苗裔	べうゑい	言		言1	人物2	言82	
73	折	へつる	言	日本紀物をわけうばふ也	言68	言 9	態31	
74	平生	へいぜい	言		言27	言25	言34	
75	偏傍	へんつくり	言	文字の	増言3	雷28	雷 9	802ウ21
76	偏頗	へんば	言		言17	言 5 7	言 3	
77	下手	へた	言		言 6	言11	態7	
78	弁説	べんぜつ	言		1 3 5	=	=	
79	変化	へんげ	曹	(へんくわ)	言2	言66	言10	
80	変改表裏	へんかい へうり	言	(++-=2)	言3	言58	言11	
82	弁々	べんべん	言言	(をもてうら) 時をうつす也辨の字のやつし	言54		雪45	
83	返事	へんじ	言	時をプラリ世界の子のやうし	言15		言20	
84		へりくだる	言		言74	言10	態15	
85	経	へる	言	年月を	書69	言 5	言64	
86	*歴	^3	曹		言70	言 5	言65	
87	減	へる	青		言63	言7	言78	
88	*耗	へる	言	かんのたつ也	言64	言7	態32	
89	片	へぐ	言		増言 7	言 8	言81	
90	*批	へぐ	言	わくる也	増言8	言8	態33	
91	諛	へつらう	言		言77	言12	態30	
92	*諂	へつらう	言		言76	言12	態27	
93	*跛	へつらう	言		1	言12	態18	
94	隔	へだつる	言		言60	言13	言73	
95	*阻	へだつる	言		言 6 1	言13	言74	
96	嬖	へいす	言	女をむかゆる也		营16	態38	
97	壓	へす	言	(へたゆる) 押なり	増言8	言17	態36	
98	平癒	へいゆ	言		言28	言26	態10	
99	返答	へんとう	言		言13	言31	態 5	
100	別格	べつかく	言		言37	言41	言52	
101	別儀	べつぎ	言		言 4 2		言58	
102	偏執	へんしう	言		言18	言56	言 4	
103	剽軽	へうきん	言		言59	言67		
104	渺々	べうべう	言	水の広キ貝	言80	言40	言62	
105	森々	べうべう	言	大水の臭なり	増言 5	营40	言63	
		一致数合計			72	80	73	44
L		所収語合計	L		247	259	268	

訓を合類節用集で補ったとみることができる。 なお、ここ

にも別の辞書から引用されたものとみられる、「俗に表具

師」という注文が存する。

施されていない類書的な辞書からの引用された可能性が高 いわけであるが、語順に若干の前後こそみられるものの全 以下にまとめて掲出されている蛇類の語群はいろは分類が 気形門は特に和爾雅との一致が顕著である。 特に 蛇灸

このうち、「薜荔」と「景天」、「女青」の語と注文は 大和本草に、「紅藍花」の注文は日本釈名と大和本草の両 草木門は四本の辞書では網羅できない語と注文が多い 一致する。

ての語が和爾雅にみえているのである。

これをきりきずにつくれば、血をとむる故に名づく。 …今世俗にへんけい草と云。筑紫にて血どめと云。 本草にも療金瘡止血といへり。煎湯にて小児のあせ いたび也。木饅頭と云。 大和本草 蔓草

…今按、蔓草の女青は俗名へくそかつらと云。 :

ぼを洗ふべし。:

大和本草

園草

葉にも呉藍とかけり。 くれのある也。 わたりて其葉藍の如くなれば、 和名抄にも、 くれは呉也。紅花は呉国より くれのあると訓ず。万 くれのあいと云。 の

あの反は、な也

日本釈名

紅花 こそ完全に網羅できないものの、ほとんどの語は和爾雅と ことがあったのであろう。以下、衣食門、 以外に関連する辞書類を別に参照して語や注文を引用する このように、特定分野の語については、 …倭語に未摘花と云ふは紅花なり 器財門とも注文 大和本草 節用集や和爾雅

合類節用集のどちらかにみられる。

群は出典注記にもみられた本朝俚諺から引用されたものと く二つに分かれる。まず、「平等」から 資料が参照されたものとみられる。この語群の典拠は大き 以前の語群はやや一致度が低く、草木門と同様に別の編纂 謙。」以下は合類節用集によく一致するものの、 方、 やや問題があるのが言語門である。 つ「苗裔」 言語門は までの語 それ

数字は表二に示した男節用集の掲載順である。 語」として掲出されている見出語を次に記す。 イロハ順に配列した辞書である。 同書の「へ」の部に「俗 出典等の注 見出語下の

みられる。本朝俚諺は諺と俗語について出典と原義を記し

平分均が 文は省略している。 平? 地* 平 安?

平? 等; 60

平 懐? 61

大和本草

蔓草

兵治65 、どつく 男節用集の 閉? 口? 66 「平うぎ 偏³ 倚* から「苗裔」 偏分 屈分 70 病冷, までの語群は、 片シャ 71 苗^辨ざえ 裔ヹロゖ 72 63 合類節

- 22 -

また、次の「折」から「返事」までの語群は元禄一三する「辨口」の後に配されたためと考えてよかろう。に入った理由は明らかでないが、「弁舌」は頭字を同じく本朝俚諺の見出語に語順までもよく一致する。「可」が間用集に収められている「弁舌」と「可」宜」應」を除くと用集に収められている「弁舌」と「で、肩」應」を除くと

一致が問題となる部分以外は省略している。 年(一七〇〇)刊行の諺草から引用したものとみられる。 年(一七〇〇)刊行の諺草から引用したものとみられる。 年(一七〇〇)刊行の諺草から引用したものとみられる。 年(一七〇〇)刊行の諺草から引用したものとみられる。

俗語

が重門 編綴 竈 変改80 平等60 返事83 下手77 にきゅう (ふとう くっこく くが) くいきゅう (ない)

資料として参照されたものと考えられるのである。て、出典注記にはみられない書物ではあるが、諺草も編纂と以外は語順までも一致していることがわかる。したがっ「変改」が頭字を同じくする「変化」の後に配されたこ

有する語に準じて扱われたものと考えられる。
本書紀を除いて典拠は省かれている。しかし、「平等」やかわらず本朝俚諺や諺草から引用されているのは、典拠をあろう。また、諺草「正譌」の見出語の場合は、正式な語あろう。また、諺草「正譌」の見出語の場合は、正式な語がおうず本朝俚諺や諺草から引用された語は「折」における日本朝俚諺や諺草から引用された語は「折」における日本朝俚諺や諺草から引用された語は「折」における日本朝俚諺や諺草から引用された語は「折」における日本朝俚諺や諺草から引用された語は「折」における日

朝俚諺や諺草から引用されたとみられる語群が存することをでいることによって補うことが可能であることが明らかになった。このような状況はもちろん「へ」の部だけではない。ところが多いこと、両書によって網羅されない部分は大和なことによって補うことが可能であることが明らかになった。このような状況はもちろん「へ」の部だけではない。ところが多いこと、両書によって網羅されない部分は大和なことによって補うことが可能であることが明らかになった。このような状況はもちろん「へ」の部だけではない。

は同様である。

集そのものであるかが問題として残っている。ここでこの 書がいくつか存するため、実際に参照されたのが合類節用 なお、合類節用集については、その所収語を受け継ぐ辞

点を確認しておく。

差違が見出される。

ないだけでなく、「嬖」や「壓」についての注文もみられ 変更したため、「平癒」「返答」などの語が先に位置し、 また、字尽重宝記は、「嬖」の語とその注文が収められて 考えられるので、主に参照された節用集とは考えがたい。 ない。これら全てを他の節用集から補った可能性も低いと 順に所収語を掲出していたものを漢語から和語という順に いないうえに、合類節用集の言語門が概ね和語から漢語の 頭節用集大全は、 「経」や「 謙 」が後に位置することになっている。そく。 言語門の「、謙、」以下の語群で比較すると、まず、鼇 | 跛」「 阻 」の語が収められて | 同(マヒクトット) | 合類節用集には存する「 歴 」の語が収められてい

みると合類節用集(或いは字尽重宝記)に拠っている部分

は意図して隠さなければならないほど大きな割合ではない

すると、男節用集編纂の段階でも同じような操作が行われ 類節用集との関係を隠すために語順の変更を行ったのだと のため、語順が全く一致しないのである。字尽重宝記が合

ても不思議ではない。しかし、男節用集の所収語全体から

められない。そこで、「い」の部の言語門に存する合類節 料であったとは考えがたいのである。最後に俳林節用集で あるが、「へ」の部を対象とした比較では明確な差違は認 用集の所収語と一致する語群に対象を広げると次のような ように思われる。したがって、字尽重宝記も主要な編纂資

Hand Hand	艘〔舟の〕 楔ぇ	出 いだすとよ 出 いだすとよ 出 いだすとよ 出 れ れ い に い だす と よ 出 い え れ え れ え れ え れ え れ る ろ る ろ る ろ る ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ ろ	事也)	国辞 (じたいする) 固辞 (世間) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本) (本	男節用集 合類
[又軼同—弓] [[兵法]	[舟—]	〔又况矧同〕		[又慍同]	合類節用集
射 (in in in in in in in in in i	艘〔舟のいすは	にちたいす (いたすの時 は声スイ也)	共よめり俗	固辞 (又いなふる 情 (すな)	排林節用集

合類節用集と俳林節用集のそれぞれに男節用集とは一致 会の課題として残しておくことにする。 と類似していることに加え、男節用集の出典注記に和漢 非本節用集は、草書のみで所収語を掲出することが男節用 非本節用集は、草書のみで所収語を掲出することが男節用 非本節用集は、草書のみで所収語を掲出することが男節用 非本節用集は、草書のみで所収語を掲出することが男節用 まに参照されたものと考えておくことにする。とはいえ、 ない例が存する。それらの語や注文はいずれも他の辞書 は、草書のみで所収語を掲出することが男節用集が 一致する を加た可能性を否定できない。したがって、詳細な検討は今 ない別が存する。それらの語や注文はいずれも他の辞書 は、草書のみで所収語を掲出することが男節用集が 一致する を加た可能性を否定できない。したがって、詳細な検討は今 ない別が存する。それらの語や注文はいずれも他の辞書 は、草書のみで所収語を担てする。とはいえ、 ない別が存する。それらの語や注文はいずれも他の辞書 は、草書のみであるため、明定なります。 は、草書のみで所収語を担てまる。

匹まと

較すると、男節用集は、所収語の数こそ多くはないものの、流れを汲む鼈頭節用集大全や字尽重宝記、俳林節用集と比流れを汲む節用集といえるであろう。同じく合類節用集の典拠のある語を重視する方針や所収語自体は合類節用集のように従来からの一般的な節用集の形式を踏襲しているが、ように従来からの一般的な節用集の形式を踏襲しているが、よりに従来からの一般的な節用集の形式を踏襲しているが、よりに従来からの一般的な節用集の形式を踏襲しているが、場別上、男節用集の主要な典拠とされた辞書を確認し、編以上、男節用集の主要な典拠とされた辞書を確認し、編以上、男節用集の主要な典拠とされた辞書を確認し、編

和爾雅や大和本草、本朝俚諺、諺草等の辞書類から語や注れていることからは、文書などで実際にそれらの語を使出していることからは、文書などで実際にそれらの語を使出していることからは、文書などで実際にそれらの語を使いない「部屋」と「表具師」が「正字」に「部屋」と「表具師」が「充字」に「常匠」が「正字」に「部屋」と「表具師」が「充字」に「常匠」が「正字」に「部屋」と「表具師」が「充字」にてもさのみ誤にもなるまじき」ものも存するが、いずれにしてもさのみ誤にもなるまじき」ものも存するが、いずれにしてもさのみ誤にもなるまじき」ものも存するが、いずれにしてもさのみ誤にもなるまじき」ものも存するが、いずれにしていない「部屋」と「表具師」を「俗に」として補って掲出していることからは、文書などで実際にそれらの語を使用する際の選択肢にも配慮していたことが窺われるのである。

「い」部乾坤門を「陰陽」ではじめ、「乾」を収めていなに資するためと考えられる。特に男節用集が行書体の使用を選択したのも、実際の書記行動男節用集が行書体の使用を選択したのも、実際の書記行動男節用集が行書体の使用を選択したのも、実際の書記行動男節用集が行書体の使用を選択したのも、実際の書記行動

として参照される元禄増補本のような節用集とは内容の上 いことからも端的に知られるように、基本的な用字の規範

学の為に

授退官記念 呼の一源流

で一線を画しているという意識が編纂者にあったためと考

たかはなお検討する余地がある。 えられるので、手本としての規範がどのようなものであっ

する語を中心とする男節用集も通俗の用から切り離されて 典拠を有する語への配慮は見受けられた。一方、典拠を有 通俗の用に応じようとした元禄増補本系統の節用集にも

編纂されたわけではないのである。

沣

- (1) この間の状況は、高梨信博「近世前期の節用集
- 四十七部非増補系諸本の系統関係―」(『辻村敏樹教授 古稀記念 日本語史の諸問題』平成四年)、「近世節用
- (2) 本稿では本行に太字で記されている語を見出語と称 年)に言及されている。 —」(『国文学研究』一二三、平成九年)、米谷隆史 集の一展開―四十七部系から四十五・四十四部系へ 「元禄期の節用集について」(『語文』六九、平成九
- (3) 若杉哲男「文林節用筆海往来をめぐって」(『国語史 あわせて所収語と称する。 し、見出語と割書中の語で見出語に準ずる性格の語を

- (5) 両書の編纂資料については、木村秀次「新刊節用集 (4) 笹原宏之「元禄十四年刊『俗字正誤鈔』に関する基 語と文芸』八五、昭和五二年)、「新刊節用集大全者 大全考(一)―その引書を中心として―」(『国文学言 礎的研究」(『国語学 研究と資料』一九、平成七年) 資料』一一、昭和六二年) (二) ―その引書を中心として―」(『国文学言語と文 「近世節用集の序・跋・凡例(一)」(『国語学研究と 第一部 論集国語学』、昭和五五年)、高梨信博 —男節用集如意宝珠大成—」(『佐藤茂教 往来物』、昭和六一年)、「物類称
- 成八年)を参照のこと。 編纂資料について」(『国語語彙史の研究 一五』、平

芸』八六、昭和五四年)、米谷隆史「『合類節用集』の

(6)合類節用集と字尽重宝記との関係については、古屋

彰「世話字尽と節用集 ―一つの改編の例をとおして

- 三年)を参照のこと。 —」(『金沢大学法文学部論集 文学篇』二五、昭和五
- (7)新撰用文章明鑑の「俗字正字之部」では、「へ」の 部の「蛇」が正字に、割書中の「 虵 」が俗字に分 書などにはくるしかるまじきが、人前え出す曠の書礼 類されている。ここでも、俗字は「内証の書礼又は覚

などには用がたし」とする。

参考文献(注に言及したものを除く)

乾善彦「書体と規範―近世の漢字字体意識の一側面―」

(『国語学』一九九、平成一一年)

小川武彦「「三才全書誹林節用集」解説」(『青木露水集 第一巻』、昭和五九年)

佐藤貴裕「近世節用集の記述研究への視点―形式的特徴を めぐって―」(『国語語彙史の研究 一五』、平成八

古屋彰「『反故集』の諺字 ―『斉東俗談』とのかかわり

—」(『金沢大学法文学部論集 文学篇』二七、昭和

五五年)

山田俊雄「節用集改編ものの一例について 城文芸』七三、昭和五四年 その一」(『成

いるものに拠っている。 本稿で引用した資料は以下のものを除き、 影印刊行されて

男節用集(享保元年刊の拙蔵本による) 和爾雅(元禄七

年刊の拙蔵本による) 諺草 大和本草 日本釈名(益軒

全集所収のテキストによる)

度化研究『百科事典型節用集の系統的研究』の成果の一部 本稿は、 平成十一年度熊本県地域貢献研究事業、学術高

である。